

読書

図書館の本をむさぼり読むことは、子供の時からの念願だった。当時、磐城高校図書館は、校門を過ぎた正面のロータリーの敷地に立っていて、小田図書館と命名されていた。南側の窓からは、芝生と庭園が見えていた。その名残は、今のロータリーの中の庭の風景に垣間見ることができる。

部活動に挫折し、帰宅部を続けているうちに、いつしか図書館で放課後を過ごすようになった時期がある。書棚の端から端まですべての本を読み通すことができたると何冊か読んでみたものの、あまりの難解さに頓挫した。最初にとった本は、カントの「純粹理性批判」であったことが災いしたのである。

それでも、「赤と黒」や「戦争と平和」や「大地」など、いわゆる世界文学全集の中の著名な作品の文章はこのとき出会ったものである。さらに、教科書の作品の著者の他の作品を探したり、司馬遷の史紀をかじったり、図書館は心落ち着けてくれる場所であった。

図書館に行かなくとも、学校帰りには、角忠に寄ってヤマニ書房によってヤンヤンの書籍コーナーによって電車で帰るのが日課となった。

ハヤカワミステリ文庫を全部読破している強者がいたり、岩波文庫の何冊かをいつも鞆に忍ばせている者がいたり、周りには、個性豊かな知的なものにとりつかれた同級生が跳梁跋扈していた。

大学時代には、蔦の絡まる図書館の中二階から、一号館を通り過ぎていく学生の群れを横目で見つつ昼前の2時間を過ごすのが楽しみであった。雨に濡れた芝生の緑や静まりかえった空間の中の孤独が、田舎から出てきた貧乏学生のすみかとして適当な場所であったと記憶している。

今、「ゲド戦記」にはまっている。アーシュラ・K・ル・グウィンファンタジーだが、娘の書籍として長らく本棚に眠っていたことを思い出し、読み出したら止まらなくなった。

ちなみに、著者である彼女は、「空飛び猫」という小説も書いており、村上春樹が訳していたことは知っていたのだが、もっと早く読めばよかった。

「消費社会」の中で、読書は無駄な行為で、より少ない努力でより大きな効果を得ることが賢明であるという命題からは大きく離れた行為であるという指摘はさておき、読み出したら止まらないわくわく感を思い出したことは、これからの生活で大きなことではないかと考えている。「知ること」「学ぶこと」を誘う知的な好奇心を大切にできればいつも考えている。